

令和7年度 校外教育研究紀要



さいたま市立西原中学校



1 研究概要

(1) 研究テーマ

校外教育活動を通じた個別最適な学びと協働的な学びの実現

(2) 設定理由

本校の生徒は、明るく素直で学校生活に前向きに取り組む姿が見られる。また、与えられた活動や課題に対しては集中して取り組むことができ、指示に基づいた学習には粘り強く向き合うことができる。一方で、自ら問いを立てたり、話し合いを通して課題を見いだしたりする場面では難しさを感じる生徒もおり、学びを主体的に深めていく力には伸び代が見られる。また、全国学力状況調査生活質問紙 39 番、市同調査 37 番にある「あなたの学校では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか。」の肯定的な意見は令和 6 年度の調査で 81.5% となっており、集団での対話を通して考えを発展させる力には向上の余地が見られる。これからの VUCA の時代には、自ら課題を見だし、多様な他者と協働しながら解決していく力が求められる。校外教育活動を単なる行事として終わらせるのではなく、目的意識をもった学習過程として構成する必要があると考え、学校課題研究と関連させ、本テーマを設定した。



(3) 研究仮説

校外教育活動において個人で課題意識をもたせ、対話と協働を通して学びを深める指導過程を構築することで、生徒の主体性・自己調整力・対話力が高まり、個別最適な学びと協働的な学びが実現することができる。

(4) 研究の視点

個人で課題意識をもたせ、対話と協働を通して学びを深めるために、以下の二つの視点を設定した。

視点 A：個別の課題設定の工夫

視点 B：集団での協働的な学びの場づくり

校外教育活動を実施する前、実施中、事後学習で視点 A、視点 B を意識し、活動に取り組ませる。

2 研究の取組

(1) 地域との交流に関する取組

・彩の国オープンファクトリー2025 in 岩槻（2年）

西原中学校2学年の11人が、夏休みを利用して、岩槻工業団地内の企業4社をレポートし、モノづくりの素晴らしさや働く人の想いなどをインタビューした。インタビューの様子はさいたま市岩槻工業団地のホームページで公開されている。

視点 A: インタビュアーとしてどのようにすればよりよくなるのか、自分の課題を設定し、意識しながら活動に取り組んだ。

視点 B: 岩槻工業団地の方々と生徒たちが話し合いながら、よりよいインタビューになるように計画・実行した。



転載元：彩の国オープンファクトリー2025 in 岩槻 ホームページ

・土曜チャレンジスクール

学校地域連携コーディネーターが中心となって、地域の方を先生としてお招きし、希望する生徒を対象に土曜日の午前中に学習会を実施している。

視点 A:自ら学習する教科や学び方を選択し、自分自身の課題の克服に向けて考えた。

視点 B:地域の先生方と対話を繰り返し、自分の課題に向かうことができた。

・環境委員 ボランティア清掃

12月1日から12月12日の10日間、生徒会本部と環境委員会の合同企画として、正門前から校舎前ロータリーの落ち葉掃きを行った。生徒会本部役員や環境委員の生徒以外に、自主的に参加してくれる生徒も見られ、活動前後では景観が大きく改善した。



視点 A:学校周辺に対して、生徒会や委員会として何ができるかを自分事として考えた。

視点 B:担当する生徒が中心となり、チラシを作ってボランティアを募るなど、多くの人と協働して取り組むことができた。

・地域夏祭りのボランティア参加

本校の学区では、夏に地域でのお祭りが活発に開催されている。地域の方のご指導の下、本校の放送委員会の生徒がお祭りでのアナウンスを担当した。また、ボランティアで会場の運営のお手伝いに参加した生徒もいた。中学校の生徒が地域の方と協働する姿が見られた。

視点 A:ボランティアの募集を見て、自分にできることは何か考え、参加することができた。

視点 B:担当する役割をよりよく実行できるように、地域の方と連携しながら活動に取り組んだ。

・第三地区体育大会ボランティア参加

本校校庭で、地域の運動会が毎年実施されている。本校からは放送に関する機材なども併せて貸し出しをしている。運動会の運営のお手伝いとして、本校生徒も活動に参加した。

視点 A:ボランティアの募集を見て、自分にできることを考え、参加することができた。

視点 B:担当する役割をよりよく実行できるように、地域の方と連携しながら活動に取り組んだ。

(2) 教育課程に関する取組

・岩槻フィールドスタディー（1年）

地元の良さを再認識するために、地域調べの取り組みやフィールドスタディーを通して、「調べる力」、「計画を立てる力」、「実践する力」など修学旅行で行う班別行動のベースとなる力を養うことを目標とした。生徒からは「改めて岩槻の魅力について学ぶことができたし班で協力して岩槻巡りを楽しむことができたので良かったです。」などの感想が見られた。

視点 A:班での自分の役割や地域の課題について自分で設定し、実行しようとした

視点 B:班員と協働し、行動することができた。また、地域の課題についても集団で迫ることができた。



・未来くるワーク（2年）

コロナ禍以降も地域の方にご協力いただき、3日間の職場体験活動を実施している。お世話になる企業についての事前学習、事前訪問に向けた電話、話し方などの練習を踏まえ、職場体験に臨んだ。販売業や幼稚園・保育園関係の他、岩槻消防署や区役所などの公共機関でも体験させていただき、勤労について地域の方から学ぶことができた。事後学習では、自分たちの体験を共有し、自身の勤労観やキャリアについて考えを深めた。

視点 A：自分の職業観やキャリアについて考え、職場体験に向けて目標を設定できた

視点 B：地域の方々にご協力いただき、職業体験させていただく中で、対話を繰り返し、新たな学びを得ることができた。



・さいたまエンジン（2年）

令和6年度より西原中学校では継続して取り組んでおり、令和8年度も参加予定である。今年度はさいたま市内に拠点を置く株式会社デサン、株式会社サイサンの方にご協力いただいた。地域の企業の方とともに、地域のリソースを探し、掛け合わせ、地域をよりよくするために、探究的な学びを深めていくことができた。



視点A：地域の課題解決に向けて、アイデアを考えることができた。

視点B：班員で協働し、内容やプレゼンをよりよくすることができた

・赤ちゃん・幼児ふれあい体験（3年）

家庭科の授業の一環である「赤ちゃん・幼児ふれあい体験」を3年生で実施している。コミュニティセンター岩槻に集まる地域の子育て世帯にご協力いただき、命の大切さなどについて体験学習させていただいた。

視点A：授業内で子育てや生命について自身の考えを深めることができた

視点B：実際に赤ちゃんや幼児と触れあい、養育者と会話することで、学校内ではできない体験をすることができた



・未来くる先生ふれ愛講演会

本市に縁があり、現在オペラ歌手としてご活躍の上沼純子様を講師にお招きし、未来くる先生ふれ愛講演会を行いました。生徒からは「今、将来の夢と言えるものがなくても、夢中になっていることを一生懸命に続けていくことで、将来につながる夢を見つけ、実現していきたい」などのコメントが見られた。

視点A：事前に自分の職業観やキャリアについて考えることができた

視点B：講演会後の感想を記入し、共有することができた



・横浜校外学習（2年）

SDG s 未来都市として認定されている横浜市から、環境、文化、地域資源の活かし方を学び、さいたま市と比較し、地元の良さを守り、活かす力を身につけることをねらいとした。各班で探究するSDG sの項目を決定し、事前学習を行った後、現地での体験活動を行った。伝統の残る地でありながら、未来指定都市に認定されている都市を周り、地域や人々の工夫に触れることができた。



視点 A：班での自分の役割や地域のSDG s 未来都市から学ぶ項目を自分で設定し、実行しようとした

視点 B：班員と協働し、行動することができた。また、SDG s 未来都市から得た学びを共有し、地元の課題解決に向けて集団で迫ることができた。

（3）小・中・高連携に関する取組

・小中合同あいさつ運動

小学校の児童会と合同の活動をすることで、小中学校の連携を図り、生徒会活動のさらなる充実を図ることをねらいとし、令和8年1月26日から8日間実施した。中学校の生徒と西原小学校の児童が互いの学校を訪れて、交流を深めていた。



視点 A:学区内の児童生徒がより活発に関わることができるよう、生徒会として何ができるかを自分事として考えた。

視点 B:生徒会が、登校する生徒が参加しやすくなる工夫について意見交換を繰り返し、ハイタッチうちわを作成し、多くの参加者を巻き込んで実施することができた。

・高校生による中学校職場体験受け入れ

瀧野川女子高校の生徒2名が、将来の仕事を考えるために本校で体験活動を行った。中学校教員の職の実態を調べるために、指導の様子を見学したり、現職の教諭から講話を聴いたりした。



視点 A:担当教諭が、高校生の訪問目的を再確認し、受け入れにおける課題設定に伴走した。

視点 B:体験後に感想を意見交換し、新たな視点を共有することができた

3 成果と課題

1年間の取組を通して、個人で課題を考え、それに対してどのように取り組んでいくかを考える時間を設定することができた。また、集団での会話を重ね、課題解決に向けた方向性を模索する姿も見られた。令和7年度全国学力状況調査「あなたの学校では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか。」の肯定的な意見は95.1%となり、前年度より13.6%向上した。

一方、物事をよりよくするには、関わる人すべてが当事者意識をもって取り組むことが大切である。今後は、協働する仲間を異質者としてとらえ、自分たち自身の考えをよりよくしていこうと探究する行動がより増えるようなねらいの設定やカリキュラムデザインを検討していく。